

石の王様

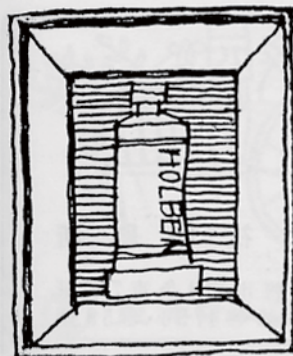
福井 正 治

Kは僕の画友である。但しKはまだ少年で僕の教え子でもある。一昨年の春、遠足に行った折、河原で昼食後、何気なく気に入った小石を拾って歩いた。石ブームで、この田舎にも石集めや、石の話で賑わって、虎の形の石をみつけたとか、翡翠だったとか、大抵は金を目当ての石集めで、欲深い汚い目付をした大人の連中の話は嫌いであったが、素直に自分の気に入った石を拾って歩くのは好きである。何時の間にか、後からKがついて来た。僕の石をみて、そんな石でない、その石は死んでいる、とはっきり断定するのだ。数学や英語はさっぱりで、いつも無口のKが、石となると目が生き生きと輝き、相当な眼力である。結局その日の遠足は全校生徒が石拾いになって、引率の教師迄が無中になった。これぞと思う石を拾うとKの所へ判定願いに行く。Kは大きな石に腰をおろして王者の様に鑑定をする。その言葉は、ただ「生きている」「死んでいる。」「一寸いい。」「これはダメだ。」と簡潔にとどめを刺す。威厳をさえ含んでいる。優等生のTやSも、親分肌の生徒も照れくさそうにおずおずとKの前にさし出す。ふだんKの居眠りを叱る数学の教師もKの前に持って行く仕末だ。僕はすっかり愉快になった。その遠足がきっかけで僕のクラスは石ブームが

起った。ブローチや首輪作りがはやり授業中みがく者が出て担任の僕を手こずらせた。校長室にはKの蛇紋や亀甲が飾られ、来客をうならせた。Kの石は奇抜なのではなく平凡な抽象で、「清兵衛の瓢箪」集めと似ていた。Kの父は何十万円もするのを品評会に出す程だからKも石を見る目が自然備わったのだろうが、僕からみれば、父よりKの集めた石の方が遥かに立派だと思えた。それはKが石に無心で欲気がないからだ。ただ純粋に石が好きで好きでたまらないからだ。Kは大変器用な子で嫌がるクラスの雑事は皆引受けた。成績はオール2で美術だけが5であった。いつも教室の隅で小さくなっていた。

卒業の日、Kははずかしそうに小さな紙包みを僕に差し出した。中にはKの彫った大小さまざまな僕の名前の見事な印鑑が入っていた。Kを送った後、僕は16年間勤めた学校を止めて、更に山奥に転った。

通勤する汽車がKの家の前を通る時、僕は必らず窓を開ける。Kがどんな日でも野良着姿で畑に立って手を振って呉れるからだ。リンゴの芽が鮮やかに映るのを目にしながら、僕はKが『石の王様』から『土の王様』に変わろうとしているのをひしひしと感じている。



Holbein

ホルベインの

洋画材料と額縁

維新堂



札幌・4丁目十字街 TEL22-0623